



2009/10 WEEKLY BULLETIN

国際ロータリー第 2790 地区第 3 分地区 B

市原ロータリークラブ会報

第 2250 回例会 2010 年 2 月 17 日(水) SAA/蔵内会員 会報担当/平野会員
例会場五井グランドホテル 市原市五井 5584-1 事務局 0438-38-3535



点鐘 市原 RC 会長 千葉精春 ソング 手に手をつないで

会長挨拶 市原 RC 会長 千葉精春



立春が過ぎ2週間あまり経過しました。梅も開花し若菜も芽を出し、まさに春の気配をあちこちで感じるようになりました。しかしまだまだ寒い日々が続いています。昨晚も雪が少しパラついておりました。風邪をひかれた方もいらっしゃるのではないのでしょうか。

「君がため 春の野に出でて 若菜摘む」まさに今日この頃の歌です。

19日は正月最初の「子(ね)の日」、宮中でも毎年この日に野に出て若菜を摘む行事が行われていたとのこと。 ご承知の通り、1905年2月23日、ポール・ハリスが3人の仲間と共に最初の会合を開いた記念日です。

この2月23日から始まる1週間は各クラブ・ロータリアンは国際理解・友情・平和へのロータリーの献身を特に認め、強調するよう勧められています。それ故、今年度早い段階からこの週、すなわち来週はと思っておりましたが、来週24日の例会プログラムは外部卓話の予定が早くから決まっておりましたので、繰り上げて本日、

齋藤 博先生にロータリーの創立記念日に合わせロータリーの創立期からの歴史についてのお話を精神論を交えながらお話いただけるかと思えます。私が入会した頃、齋藤先生のお話はクラブの卓話でも、また他の機会でもたびたび聞かせていただき感銘を受けた次第ですが、このところ中々お聞きする機会がありませんでした。ここ数年の間に入会された方は今日初めて聞かれるのではないのでしょうか。ご期待下さい。

さて、国際協議会も終わり、3月に入りますと地区でも新年度に向けての3つの会議、チーム研修、PETS、地区協議会が始まります。3月早々にチーム研修がありますが、織田GEより、当クラブから次年度地区委員になれる方のクラブとしての推薦依頼がきました。私今年度会長宛に署名依頼がきましたので署名提出させていただきました。

次の5名の方です。(地区史編纂委員)齋藤 博会員、(指名委員)白鳥 政孝会員、(RYLA 委員)津留 起夫会員、(会員増強・拡大委員)小池 清二会員、(インターアクト委員)藤谷 泰弘会員。ご活躍をご祈念申し上げます。

そしてもう1点申し上げなければなりません。

「地域社会貢献基金」についてですが、昨年10月終わりに今年度の支援先として9件の個人・団体が決まり、11月から早速それぞれの活動をしております。そして規程では2ヶ月位に1度、集まっていたき、それぞれの活動状況を報告して貰うようになっております。地域社会貢献基金の執行・管理は「社会奉仕委員会」があたると、これも規程で決まっております。一月早々にはお集まり頂かなくてはならなかったのです。当初より社会奉仕委員長さんにはお願いし、その後も今日まで何回も口頭ならびに FAX でお願いしてききましたが、未だ開催の予定が無いようです。今日は委員長さん欠席のようですが、これ以上私からのお願いではどうにもならないかと思っています。今日は委員長さんの出欠の有無に関わらず当初からこのことは会長挨拶でお話しようと思っていました。どうか社会奉仕委員会委員の方も、今日何人がおられるかと思えますので委員長さんに進言し至急対応して下さい。これは対外的な事業です。しっかりとご認識いただき、会員の皆様も社会奉仕委員長さんをお願いして下さい。会長挨拶でこんなことはお話ししたくないのですが、一言苦言です。

幹事報告 幹事 泉水孝夫

来週2/24(水)の例会ですが、12:00より食事ができます。



「裁判員制度について」と言うテーマで千葉北RCの和田治文(ワタルフミ)様に40分位の卓話をお願いしております。ご出席よろしく申し上げます。

委員会報告

国際交流委員会 山本委員長



米山コイン
お願いいたします。



来る 2 月 23 日はロータリーの創立記念日でありまして、そんな処から本日の卓話の御指名を戴いたのではないかと認識致しております。

1905 年 2 月 23 日の晩、ポールハリスは 3 人の仲間とシカゴのユニティ ビルの一室に初めて会合を持った。4 人は弁護士の P・ハリス、石炭商シルベスター・シール、鉱山技師のガスターバス・ロアー、仕立屋のハイラム・ショーレ。翌日 5 番目の会員として印刷屋のハリラグレスが、更に不動産業者のビル・ジェンセンが加わりました。

初めの名称は「ブースター・クラブ Booster club(推進者)と云うものでしたが、後に各自の職場を持ち回りで会合をもち、役員も一年毎に交替することからロータリー・クラブと云う名称が決められたということです。

そこで、ロータリー運動の趣旨を正しく認識し未来に連動して行くためにも、ロータリー運動とは何ぞや、このロータリーの基本となるべき原理原点、を再確認することも大事なことと存じまして、本日はこの点を主題にして、現状と将来像に就いて申し述べさせて戴きたいと思っております。

私達は平素無造作に、ロータリーと言う言葉をロータリアンまたロータリーの例会、クラブ等の意味で用いる事がありますが、先人達が使って来たロータリーと言う言葉の本来の意味は、「思想」を意味するものであったようでございます。その明文上の根拠は、1923 年のセントルイスの国際大会において採択された決議第 23-34 号、その第一項に「ロータリーは、基本的には一つの人生哲学であり、利己的な欲求と他人の為に奉仕したいという感情との間に常に存在する矛盾の、調和を目的とする人生の哲学である」(手続要覧 p84)と明言しておりまして、20 世紀初頭の先人達は、ロータリーを 思想の次元において捉えていたことは明らかであります。そこでこのロータリーを理解する為には、色々な角度からのアプローチがございまして、今は発展の歴史の観点より申し述べてみたいと存じます。

1) 原始ロータリー論

190 年、創立直後のロータリーの中心概念は相互扶助、彼らが只管こだわり続けた行動は、職業上の助け合いでありました。シカゴ・クラブのロータリアン達は資本制社会の基本である、自由競争から起こる商人達の疑心暗鬼の気持から些かでも解放される為に、同業者を排除致しました。その結果少数の例外を除いては、会員の企業は発展しまして、経済的にも恵まれるようになり、貧乏商人の出世物語りであったのでございます。だがこの時点では未だ「奉仕」と言う概念に、心傾ける事はなかった。

しかしこの原始ロータリー論は、そう長くは続きませんでした。その理由の一つは、同業者を排除した為に大多数の職業人は、よしんば入会を望んでも入ることは許されない。たまたま入会を認められた少数の会員だけが相互扶助の恩恵を受けまして、大多数の職業人は世の荒波に捨て置かれたのですから、当然の事ロータリー・クラブは一部職業人のエゴイズムの団体であるとの批判を受けました。そこでポール・ハリスは、「我ら少数の職業人の親睦のエネルギーを、挙げて世の為人の為に放流しよう」と宣言する。時に 1907 年、クラブ結成から 2 年後の事で、初期ロータリーにおける奉仕の概念が、膿げながら誕生いたしました。こうして親睦を目的として始まった原始ロータリーを基として、今日に至るまで、ロータリー思想の潮流にも二筋の大きな流れがあったのでございます。

2) 「奉仕」JService concept の誕生と「利己と利他との調和」論

その一つは 1908 年シカゴクラブに入会したフレデリック・シェルドン(Frederick Sheldon)によって提唱された、実業倫理的な思想であります。

シェルドンは元々ミシガン大学経済学部卒の秀才で、シカゴの町で販売学を教える学校を設立し、その資格でシカゴ・クラブに入会が認められたのでした。彼はロータリー運動が漠然とではありましたが意識し始めた対社会的な目的に、ミシガン学派の理論「奉仕の哲学」を導入したのでございます。

シェルドンの説く処によれば、商人は利潤無くして自己の事業を成り立たせることは出来ない。しかし利潤獲得に名を借りて、儲けの為ならば手段を選ばないと言う事になれば、社会が如何に醜いものになるかは明らかである。そこでミシガン大学で学んだ「利己(自分だけの利益を計ること)と利他(他人に、利益を与えること)。この利己と利他との調和」こそ、商人と顧客との間の関係を規律すべき大原則でなくてはならない。この時商人も利益を得て、同時に顧客も又、物心両面の幸せを得る事が出来る。そして「利己と利他とを調和」せしむる心の場、これを奉仕と呼んだのであります。この「奉仕の心 J(ideal of service)が、商取引には肝要な事なので、この「奉仕の哲学」を日常生活において実践するとき、自分の努力の結果である処の利潤に支えられて、地域社会からも尊敬と信頼を受けて、商的文化伝統を後世に伝えることが出来るものと考えたのであります。そして、シカゴクラブの「親睦」こそ、奉仕の心を会得せしめる「場」であるとしてました。

このようにして元々ミシガン大学において開発された「奉仕」と言う学理的概念が、ロータリーの世界に導入されたのでございます。ですから今日、ロータリアンが漠然と「奉仕」と言う概念を、他者に対する善意や思いやり、弱者に対する慈善行為などと推察しがちであります。より厳密に申せば、ロータリーの奉仕とは「利己と利他との調和」の事を言うのだと言うことを、心に留めておかなければならぬのでございます。

シェルドンは1921年6月14日スコットランドのエジンバラで、国際ロータリークラブ連合会第10回大会が開かれたときに、全世界の指導的ロータリアンの前で、Philosophy of Rotary:ロータリーと云うのは、どう言う思考形態をもった哲学なのかを体系的に説きました。

要約しますと、ロータリーは人間関係論的哲学でありまして、人間各人の肉体の背後に魂がある。死に至るまで自然との接触だとか人間関係を通じて、魂が浄化されて行く。魂が浄化される事を通じて、行動の質が高められる。その高められた心で企業管理する人には、良質な利益が最大限に齎され、また係わりをもった総ての人達に、物心両面の幸せを配分する事ができる。この時企業経営と地域社会の健全な発展が、見事に調和する。

其の魂の浄化の生産母体がロータリークラブである。売買の根底にある人間関係の交流の実像と云うものを、己を磨きながら会得して、これを社会に適應して行く為に、ロータリー運動があるんだと説いたのであります。

シェルドンは1921年に、この標語の境地に合わせるため“超我の奉仕 Service above self”を提唱しまして、やがて彼の思想は、1923年セントルイスの国際大会において採択された決議23-34号の第1項に、実を結ぶ事になるのであります。

(手続要覧 p84)

3)その他の原理の提唱

しかしシェルドンの立場だけが、ロータリーの本質を理解する唯一つの道ではなかったのです。

ロータリー思想の他の流れは、1911年、ミネアポリス・ロータリー・クラブの初代会長フランク・コリンズ(Frank B, co II ins)の提唱した“Service, Not self”という、優れた宗教的な思想であります。即ちロータリーの奉仕は、自己を否定する精神世界のみを、ロータリーの「奉仕の理念」と考えたのであります。自分を犠牲にして、この宇宙を支配する神の世界の秩序体系の中に、一(いち)人間が帰一することをもって奉仕だと考えた。これは中世キリスト教神学の思想に由来するものでして、宗教的な色彩が強いものでございます。

米山先生を始め、初期ロータリーの指導者は、殆どこの考え方を採っております。

商人は常(つね)日頃の商取引の場において、「利己と利他とが調和」する間は良いが、もし仮に極限状況になった時、利己を取って利他を捨てるべきか、それとも利他を取って利己を捨てるべきかの二者択一の状況に立たされた時、ロータリアンたるものは、利己を捨てる方を選択すべきであると言のであります。この主張を1911年の全米ロータリークラブ連合会の大会で、彼はこの境地をロータリーの本質なり!としまして、これを“Service, Not Self”「自己滅却の奉仕」と呼びました。この立場を取りますとロータリーの本質は宗教と同一である事になり、これに対してシェルドンのような立場を、実業倫理主義と呼ぶのでございます。

第三に素朴で善意のロータリアンは、そんな難しい理論よりも、他者に対する暖かい行動の方が、遥かに世の為人の為になると考えておりました。

以上三つのほかに、第四の立場は、原理と実践との調和を大切にすべきであると言うものであります。1914年の国際ロータリー・クラブ連合会会長でありましたフランク・マルホランド(Frank Mulholland)は、シェルドン一派の考え方はロータリー思想、の社会改良を主張するあまり、地域社会の弱者救済に比較的冷淡である。高度の理論に酔いしれて、実践行動をなおざりにする傾向があると批判しました。この動きに対しシェルドン一派は、奉仕の心をロータリー運動の主たる目的と考える時、弱者救済の行為は、飽くまで付随的效果でしかない。又その目的に沿った専門事業団体もあり、ロータリー・クラブは側面から援助すべきであって、自ら前面に出て責任を負うべきではない。クラブが団体行動を行う事は慎むべきで、これをもってロータリー顕彰(Itんしょう)と信ずるは、正理論の歪曲(わいきょく)と言わねばならないと反論致しました。

このような理論整然たる攻撃を受けて素朴な善意論者は唯々戸惑うばかり。心の中に強い怨念が残ることは明らかであります。

4)問題の最終的決着――

『奉仕の実践に関する決議23-34号』 以上のようにロータリーの奉仕とは何ぞやと言う事について、ロータリーを愛する人々が集まった正統派と、実践派が対立しまして分裂も招きかねない葛藤がありました。

何れかに決着を付けねばならない事は必定で、この事態を迎えたのが1923年の事、ロータリー運動の本質は何か。ありとあらゆる思想の対立を調和させようと言うことで、原理と実践を体系的に纏め上げて、セントルイスの国際大会において、第34号議案として提起されたのでございます。

この案を起草したのは、時のシカゴ・クラブ会長ウィリアム・ウエストバーグ(William Westberg)とテネシ州、ナッシュビルロータリークラブの会長のウィリアム・ンメニアー・ジュニア(William Manier Jr)でありました。

故にこの決議を「1923年の決議第34号」と呼ぶようになりまして、冒頭に「ロータリアンの総てが、千差万別の社会生活に、奉仕の心を実践するよう奨励し育成することである」と記されて、今日の四大奉仕、クラブ、職業、社会、国際奉仕の総てを包括して各ロータリアンの行動の面から捕らえた表現方法であることが分かります(手続要覧p84)。

この決議34号はこれまでの議論を集約し、原理と実践の調和の立場から明快に解決を付けた理論的集大成でございまして、

これを見ますとロータリー運動は、誠に高尚な文化性を備えた原理運動である事が自ずから明らかであると思うのでございます。今日何れのロータリー・クラブにおきましても、現実の実践課題に直面して、八テ、ロータリーは一体何ぞやと問う時に、必ずや単純明快に原理についての解答を与えてくれるのは、この決議23-34号でございます。

その後1927年に至り国際ロータリー理事会は、決議34号によって我々は原理と実践との調和の原則を開発した。既に原理を把握した以上は、これからのロータリーは実践の世界に入って行こうと言提唱となりまして、此の時、奉仕の4分類法、クラブ奉仕、職業奉仕、社会奉仕、国際奉仕を各クラブの事業計画に取り込み、それを管理する委員会を作りました。

1960年になりますと、国家と国家との対立とは異なる地球上の、全人類の貧富の格差の対立が起こり、1968年「世界社会奉仕」と言う新しい概念が出来て、ロータリーの思想はここに完成を見たのであります。

こうしてロータリー運動が今日の発展を迎えた原動力は、先輩ロータリアンが優れた原理を開発し、ロータリー哲学を根底においたクラブであったからであります。

日本のロータリーは、昭和7年ぐらいから昭和12、3年迄の間、軍閥の弾圧を受けました。その理由は、ロータリーはアメリカに本部のあるスパイの手先だとか、或いはフリーメーソン(国際秘密結社)の隠れみのだと言って所轄の弾圧を受けた。結局昭和15年8月8日に静岡ロータリー・クラブ、が真っ先に解散、8月12日大阪クラブ、19日岡山クラブ、21日京都クラブ、そして9月5日神戸クラブ、9月11日には東京ロータリー・クラブが解散した。解散に際し日本のロータリーの生みの親、米山梅吉氏は「重い足を引きずって、私は今この壇上に立つ。こんな辛い気持ちで皆様に語らねばならぬのは、20年来初めてである。創立以来20年を顧みるとき、誠に感無量である。この間ロータリー・クラブが如何に国家に貢献したか、其の歴史は燦然と輝いている。私は皆様にお礼を申し上げ、自分の不行き届きをお詫びしたい」と言って、その壇上から降りられた。これが日本のロータリーが、軍閥の弾圧によって壊滅した最後の姿だったのであります。

が、このようにして潰された組織、ロータリー・クラブと言えない状態になった時でも戦前の日本のロータリアンは、その活動をやめなかった。9月5日に神戸ロータリー・クラブは解散した。その次の9月12日に神戸木曜会と名を変えて同じ例会を開いた。大阪は金曜会、東京は東京水曜会、札幌は職能協会、福岡は、清く和すると書いて福岡清和会などと名前を替えながら、29のクラブがその運動を続けました。このうち17のクラブが昭和24年国際ロータリーに復帰するまで、引続き例会を開催していたという。

なぜ解散させられたのかと言う理由を考えますと、これは徒事では無いのであります。例会は必ず特高警察の監視する中で続けられた。一つ間違えば憲兵隊にしょっ引かれる恐れは十分ある訳で、身の危険を顧みず、ロータリーの伝統を守って行ったのであります。そこまで彼らを燃えあがらせたには一体何か。それは当時の会員はロータリーと言うものは単なる組織だけではなく、崇高な思想、として理解していたからであります。ロータリーを地域社会の職業人との切磋琢磨を通じて、ロータリアン各自の「経営観の質」を高めようとする、個人倫理を中心とする一つの思想開発の世界として理解して、これが確信にまで高められていたのであります。クラブという制度は壊滅したが、ロータリー運動を捨てる気にはなれなかった。

やがて神戸は戦災で丸焼けになる。例会場のオリエンタルホテルも壊滅。例会場は同和火災のビルの地下室に移る。昼でも停電で暗く、例会場にはローソクの炎が揺らいでいる。食料がない。皆弁当持参で例会を続けたと言う。神戸木曜会は戦後昭和24年に国際ロータリーに復帰するまで、一度も例会を休まなかったと、直木太一郎著“我らのつどい(p93)”に記されております。

今日のロータリーは、このような状態におかれたとき、手弁当で官憲の弾圧も恐れず、まさに隠れキリシンの様にロータリー運動を続ける人間が一体何人居るでしょうか。あの当時48クラブ、ロータリアン数2142名、今から考えると本当に少ない。しかしその少数の人達は、素晴らしかったと思います。

そのエネルギーがやがて昭和24年(1949年)に国際ロータリーに復帰したとき、その戦前の人達の優秀な思想は、また戦後のロータリーの拡大に繋がって行く。従って戦後のロータリーの拡大エネルギーの源は、戦前のロータリアンの思想に在るということをお忘れはならないと思います。戦前のロータリー20年間の歴史観、これが所謂日本ロータリー史の中核でありまして、その延長線上に戦後のロータリーがあるの考えるのが正しかろうと思う。ロータリーはやはり思想があつての制度であります。

「ロータリーモザイク」を書いたハロルドトーマス氏は、1970年代の章の冒頭に「我々多くの者は憂慮に耐えないのであるが、ロータリーが樹立されて今日の力と安定にまで築き上げられたその基本的特質の二つが、次第に希薄に、更により希薄にされる方向に向かう傾向がある。この二つとは、会員制における職業分類の原則と、もう一つは例会への規則的出席である」(p319)と記しました。現今、正にハロルドトーマスが予測していた様に、その原則が守られなくなった。今、大事な局面であります。

ロータリーには親睦と奉仕という二つの基本概念がありまして、この二つが密接に絡み合いながら、1915年の「ロータリー倫理訓」を採択し、会員の個人倫理と言うものを確立して、原理運動として隆々と栄えて参りました。ポール・ハリスは、クラブの親睦を守るべく同業者を排除して、一業一会員制の原則を採用しました。この一業一会員制の原則と規則的例会出席は、ロータリーの核にある原則で、ロータリーの本質に根差した、組織の原点なのでございます。処が2001年の規定審議会で、01-148号議案により一業一会員制が廃止れ、ロータリーの組織の「核」が崩壊致しました。これは何と、国際ロータリーの理事会の提案だったのであります。こうなるとクラブの中に当然、開業者が沢山入ってくる。資本経済社会は、自由競争の社会であります。同業者が俺の潰れる前に相手が潰れて欲しいと云う、訳の分からない感情の虜になる。

現に一業一会員制の原則の廃止により、ロータリーに幻滅の悲哀を感じてクラブを去って行く人が沢山いる訳で、特にロータリーに熱心な方ほど退会して行くようであります。

昨今の国際ロータリーは、倫理を提唱することよりはむしろ、弱者救済、所謂人道主義的な奉仕活動とか、ロータリー財団、ロータリーの拡大、会員増強という点に重点があるかのように見受けられまして、経済不況もあろうことは否めませんが、根的な原因は、昨今のロータリーが基本から逸脱したことに、大きな原因であることは明白であります。

ロータリーの魅力は何と云っても、素晴らしい仲間と総てを話し合える例会にあり、異業種の知恵を学び合うのでございます。ロータリーの「奉仕の哲学」などは何処かに置き忘れ、実生活に追い回されて、例会でも楽しく語り合うと云った親睦すら低下しては、もうロータリーの魅力は激減し、欠席者・退会者が多くなるのも無理はないと云わざるを得ない。

古代ローマ帝国の、ローマ法に内在する「所有権の定義」と言う原理は、国が滅亡するに及んで、その法律は無くなりましたが、1700年の歳月を経て、現在の民法の206条にそのまま復活継承されているという事です。

一業一会員制の原則は、ロータリーの本質に根差した良質な原則であります。世は時々刻々と変化してく。従って一時に消滅しても、先人の開発したこの良質な原理は、何れ時代を超越して、必ず復活するものと恩われます。

時代がどんなに変わっても、その人間の腹構えを教えてくれるのは哲学であり、思想、であります。社会が変わっても変わってならないものをじっと持って、社会のリーダーシップを発揮しよう。その腹構えがあるからこそ、津々と新しい発想が湧き出てくる。そういうものを持つがゆえ、千変万化な社会状況の中で自分の企業を自由競争の場に於いて、何時も勝利の方に導いて行くと云う、そういう管理者たるものの知性が育てられてくるのではないかと思います。庶民の哲学と言われるロータリーから、例会を通じてこういう腹構えを学ぶのであります。

「ロータリーは終わりなき命の旅であり、その旅を続けることに、人生の意味を見出せるものである」と云われております。自分にとってロータリーとは何か、何故ロータリーに入り会員であるのかを、時に静かに虚心に考えてみる必要があると思います。

その為にも、曾て我々ロータリーの先輩が開発した良質な思想、を、そしてその心を汲み取りながら、その延長線上に物事を考えて行く姿勢が大切と思うのでございます。

以上

ニコニコ・Sorryボックス

千葉会長・泉水幹事

斉藤博会員 卓話ありがとうございます。

藤谷会員

斉藤先生、卓話ありがとうございます。ロータリー情報委員会としてお礼申し上げます。

南山会員

先日の炉辺会議では、多くの皆様、私の下手な卓話を聴いて戴きまして有難うございました。

なお後継者問題では、二代目社長達の御意見を尊重いたします。

千葉会長

南山さんには、先週の職業奉仕委員会の炉辺会談でのお話、ありがとうございました。

南山さんの50年余りに渡る職業への取り組み、よく理解できました。

又入会暦浅い会員からの南山さんへの進言に耳を傾ける姿に感激しました。

出席報告

前々回 100% 本日出席 37名 欠席 8名 本日出席率 82.2%